英国病理学会派遣報告書

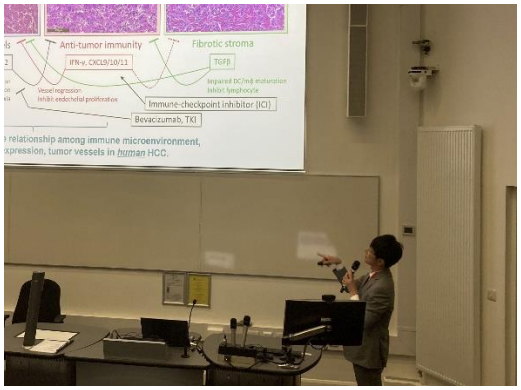
慶應義塾大学医学部病理学教室　　紅林　泰

この度、日本病理学会の日英交流事業の一環として、英国リバプールにて行われました英国病理学会（Liverpool Pathology 2023; 14th Joint Meeting of the British Division of the International Academy of Pathology and the Pathological Society of Great Britain and Ireland）に、大阪大学の田原紳一郎先生とともに参加させていただきました。

英国病理学会は例年、ヨーロッパ病理学会と比較すると小さめの規模で行われているようで、今回もリバプール大学の中心部にある建物の一角で行われました。演者の多くはマイクを使わず発表し、発表が終わると参加者は席に座ったまま次々に質問し、フランクな雰囲気で活発に議論が行われていました。私は初日の午後に「Classification of Immune and Immunovascular Tumor Microenvironment of Hepatocellular Carcinoma through Detailed Histopathological Analysis」という演題で、これまで研究してきた肝細胞癌の免疫・血管微小環境の病理学的検討に関する発表をさせていただきました。英語での質疑応答はいまだ慣れない私ですが、日本人だからと遠慮することなくフロアから的確な質問、コメントを頂くことができました。学会全体を通して、主なセッションは消化管病理と腎泌尿器病理に限られていましたが、これらの分野における著名な病理学者の講演を聞くことができ、英国病理学の伝統を窺い知ることができたように思います。米国の学会では、ビッグデータを提示して量で他を圧倒するような発表が多いように感じますが、今回参加した英国の学会では、取ってきたデータの中から必要なものを吟味して minimum dataset を持ち出して説明しようとする姿勢が感じられ、印象に残りました。

学会はコロナ前の状態に完全に復帰しており、マスク無しは当然のこと、立食あり、アルコールありで大変賑やかでした。会期中の夕方から夜にかけては、Conference Dinner が行われたほか、リーズ大学の Heike Grabsh 教授とその研究室メンバーと Pub で飲み、英国の病理学事情について伺うことができました。英国から日本に若手病理医が派遣される際にも、適宜、気の利いたおもてなしができたらと思いました。英国を訪れるのは今回が初めてでしたが、学会の空き時間にはリバプールを散策することができました。リバプールと言えばジョンレノンとストロベリーフィールズ・フォーエバー、ということで、ストロベリーフィールドにも足を延ばしてみました。

最後に、今回の貴重な機会を与えてくださりました、日英両国の病理学会に御礼申し上げます。特に、今回の派遣に際し大変お世話になりました、日本病理学会国際交流委員会委員長の都築豊徳先生ならびに病理学会事務局の皆様に深謝いたします。



左上：リバプール大学の様子。広い敷地内に、古い歴史のある建物と、新しい近代的な建物が混在している。右上：英国病理学会 President の Mark Arends 教授と。左から都築先生、Arends 先生、筆者、田原先生。左下：消化器病理のセッションでの講演の様子。右下：発表する筆者。